

中国語離合詞が提起する文法問題（その1）

著者	大滝 幸子
雑誌名	明海大学外国語学部論集 = Meikai journal, Faculty of Languages and Cultures
巻 号	3 1991
ページ	91-100
発行年	1991-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2297/40971

中国語離合詞が提起する文法問題(その1)

The Semantic Analysis of Chinese Compounds
That can be Expanded

大 滝 幸 子
Sachiko Ohtaki

明海大学外国語学部論集 抜刷

第3集——1990

中国語離合詞が提起する文法問題 (その 1)

The Semantic Analysis of Chinese Compounds That can be Expanded

大 滝 幸 子

Sachiko Ohtaki

Summary

This paper endeavours to study co-occurrence restriction of the inserted component (e.g.—aspect particle / measures / pronoun) and the grammatical function, in Chinese compounds. We expect that one word certainly has only one sememe, regardless the word is a content word or a functional word. Therefore, it is logical to analyze both grammatical and lexical features of the inserted components.

In order to clearly describe what grammatical features are, we suppose several grammatical categories: (1) speech time, predicate present, event present, (2) verb's premise state, verb's transition state, verb's stability state, and (3) the four levels of statement. By introducing these categories, the data of co-occurrence restriction suggest how different these two qualities—'aspect' and 'tense'—are, and that the verb's four groups may have significant grammatical differences.

1. はじめに

従来、「離合詞」と呼ばれてきた単語のグループは、趙元任 1968 の指摘する Ionization (離子化) の機能により、単語とフレーズとの中間の言語形式と見なされている。本稿は同一の立場に立ち、離合詞の中間に挿入できる形式の検討を通して、いくつかの文法課題に対してデータに基づく回答を出そうとするものである。離合詞が文法課題の検討にふさわしい題材と見なした理由はつぎの 2 点である。(1) 形態素間の語義上の関係が、単語と単語との関係より緊密不可分であり、単一の語義的意義特徴が見いだせる。したがって語義的呼応の法則を適用しやすい。(2) 一つの離合詞の中の目的語成分はフレーズの目的語のように多くの格を担う可能性がなく、恣意的に入れ換えることができない。また、自由に修飾成分を加

えることもできない。したがって、筆者がこれまで文法を分析する論拠としてきた仮説「陳述文法の四段階」¹⁾のうち、もっとも基本的な認定レベルから叙述レベルへの移行を確認しやすい。離合詞を対象として検討しうる文法課題には少なくとも以下の12項目があると考えられる。

(1) アスペクト辞 (le, zhe, guo) について、完了態、継続態、経験態、の語義的意義特徴および文法的意義特徴 (以下意義特徴と言え、この二種類の意義特徴を合わせ指すこととする。)の再検討。

(2) 結果補語 (wán, hǎo) (shàng, xià) (kāi, qīlai) 各組の意義特徴の比較

(3) 結果補語の可能形式 (de, bu) と、可能補語との文法的意義特徴の違い。

(4) 継続期間を示す時量補語と、動作の回数を示す動量補語 (cì, huí) との文法的意義特徴の比較。

(5) 動量補語 (ge) の特殊性。

(6) 動量補語と数量補語との境界線 (yìdiǎnr, yíxiàr) の検討。

(7) 不定詞 shénme の反語用法と疑問用法との比較を通して shénme 及び離合詞の意義特徴の検討。

(8) (zhèige, nèige) の比較を通して、近称と遠称の意義特徴の再検討。

(9) 人称代名詞と (de) とを組み合わせた形式が表す格 (動作対象、原因など) の区別と、その区別が生じる原因。

(10) (de) が表す意義特徴の検討。

(11) 離合詞の中で、形容詞的なものと動詞的なものとの比較。

(12) 離合詞の中で、フレーズ的なものの用法 (限定修飾、叙述修飾など) の区別とその区別が生じる原因。

本稿では紙幅の都合上、(1) を中心として (2) (10) (11) の一部を取り上げるにとどめる。

2. データーとその整理

本稿で調査対象とした離合詞は548個であり、現代漢語詞典に納められた離合詞の約4分の1にあたる常用語をえらびだしたものである。その離合詞おのおのに31種類の挿入成分をたてて、挿入できるかどうかインフォーマント調査を行い、その結果を基本データーとして以下の考察を進めていく。

インフォーマント調査の回答形式は次の4種類とした。

○……自分が日常会話に使う。

△……他の人は使うかも知れないが、自分は使わない。(方言や教養の違い、年齢の違い) または、特殊な文脈がある場合に限り、自分も使う。

空白……耳にすると奇妙であり、間違いだと思う。

インフォーマントとして依頼した方は延べ7名である²⁾。50歳代1名、40歳代2名、30歳代2名、20歳代2名である。以下用例として用いる中国語文は、全員一致して自分も使うと報告があったものに限定してある。また、548個の単語を形態素の間の語義的關係によって分類すると、それぞれの所属個数は次の通り。

- (1) 動賓関係……524
- (2) 並列関係……7 (記録, 鞠躬, 拍照, 跑步, 洗澡, 游泳, 游行)
- (3) 動補関係……13
- (4) 主述関係……4 (口服, 心服, 心慌, 心软)

動補関係は挿入形式が「de, bu」に限られ、主述関係も極めて限られた形式しか挿入できない。したがって次の用例は主として動賓関係の離合詞から成る。

3. アスペクト辞挿入に関する問題点

3-1. le, guo, zhe 挿入の成否

le, guo を対比しつつ考察するために、le, guo を挿入できる離合詞 524 個を次のようにグループわけした。

△ 印(主に若い世代に △ の報告が多い)の用例は、一般的用法ではないと見なして挿入可能の数にいれなかった。

- 1A * * le, guo 共に可 ……358
- 1B * * le のみ可 ……68
- 1C * * guo のみ可 ……61
- 1D * * le, guo 共に不可 ……37

3-2. guo の意義特徴の検討

従来、経験を表すとされてきた guo であるが、上記の 1B (le のみ可) に含まれる離合詞のなかで同一の形態素を含んでいるものに次のものがある。

成 chéng (材, 家, 名)

开 kāi (飯, 鍋, 課, 「門」, 頭, 業, 張)

* * この开门は、毎日毎日その日に開業する意味を表す。

これらの離合詞を典型として、1B の離合詞に共通の語義的意義特徴を鑑みるに、「一度変化すれば、二度と元の状態には戻らない」を想定できると考えられる。過去の出来事であったとしても、通常は何度も繰り返されうる出来事を表すのでなければ「経験態」とはみなされない(すなわち guo と共起できない)ことが推察できる。そこで、相互呼応の原則により guo の語義的意義特徴のひとつとして「一つの変化の過程が完結し、その変化があった痕跡

が消滅する」「繰り返される可能性がある」を認めることとする。

では、guo の文法的意義特徴としてはどのような内容が考えられるだろうか？ 文法的意義特徴を記述するためには、文法範疇としてどのような概念を設定するかをあらかじめ明らかにする必要がある。本稿では、以下の項目のごとく文法範疇を定める。

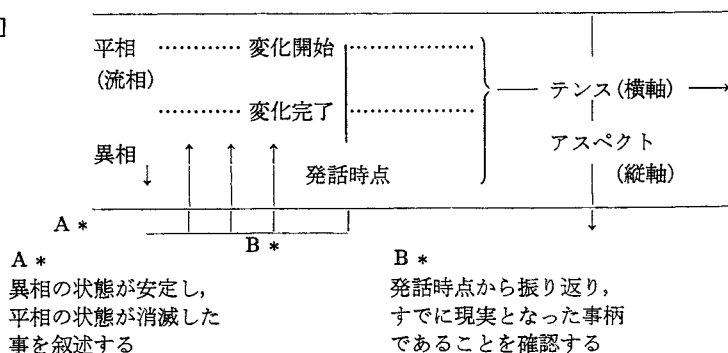
(項目 1) 「認定レベルでの事柄」が事実化する＝動詞の意義素に含まれる 弁別的意義特徴が叙述内容の一部を構成する。発話時点において表現者によって事実化したことが確認された事柄＝現実。

(項目 2) 事実化のおきた瞬間＝事実化事点(叙述レベル)。叙述時点(叙述レベル)と発話時点(伝達レベルの文法範疇—叙述時点の一種でもありうる)はともに時の流れに幅がありテンスと関わる。

(項目 3) 動詞の意義素内において認定される変化の三段階。平相＝変化が生じる前の段階、流相＝やがて終結することを前提とした変化の過程、異相＝変化が生じた後もはや変化することの無い状態。それぞれの段階において意義特徴が存在しうる。

以上、3項目は、次の [図 1] の如く、まとめられる。

[図 1]



アスペクト辞 guo に2種類あることは、W. William 1965, 劉月華 1988 などで、すでに論じられている。本稿ではその2種類の guo に対して、[図 1] A* のように定義された、事の経過にのみ関わる「終息態」と [図 1] B* のように定義された、話時点から時の流れを遡る「反復経験テンス」という名称をつけることにする。以下、ふたつの guo に関する形式上の裏付けを挙げる。(1) 終息態の guo は語気助詞 le と連結できるが、経験テンスの guo は連結できない。(2) 経験テンスの guo は回数を表す huí や cì と共起できるが、終息態は共起できない。(3) 終息態の guo は未来時制の文の中で、陳述を担わない方の分句で用いられるが、{(例) 咱们明天吃过饭就出发。(劉 1988)} 経験テンスの guo は未来時制の文中では用いられない。

これらの形式上の共起制限は 1A, 1C の用例から確認し得た。また、若いインフォーマントたちは 40~50 代の人よりも終息態の guo を用いがちな傾向が見られた。

今回のインフォーマント調査では、この2種類の guo を区別しない設問方法をとったが、guo と共起しない離合詞の語義的意義特徴を通して、この両者の区別をより深く考察できたと考える。

3—3. le の意義特徴

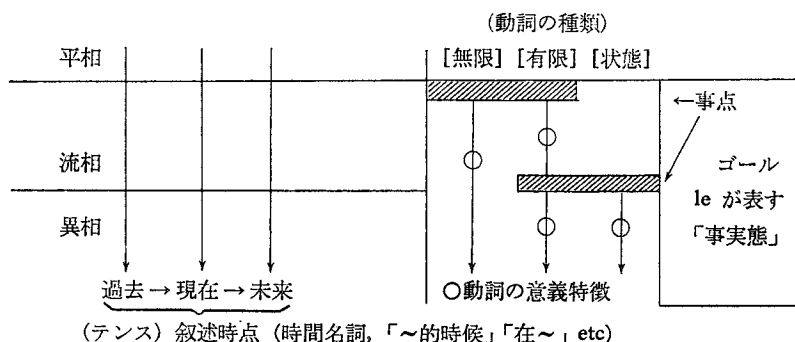
le と zhe の意義特徴は、王力 1945「中国語法理論」を始めとし、基本的には完了と継続とみなされてきた。さらにまた、le は語気助詞 le との比較により検討されてきた。本稿では、離合詞の中で le を挿入できない 1C のグループ⁸⁾に共通する形態素を考察してみた。

同 tóng (班, 事, 学)

(搭, 結, 就, 作) 班儿 bānr

これらは、一定の期間同じ状態であることを意味する。しかもすべて zhe と共起できないことから、その期間は時間の流れに属するものであり、事の経過には関わらないと考えられる。そこで、le について従来からの諸説も鑑み「一つの事柄が完成して(事実化)次の事が始まる体勢になっている」という語義的意義特徴を想定する。([図 2] 参照)

[図 2]



また、le の文法的意義特徴として、「平相から流相(無限動詞の場合)または異相(有限動詞または状態動詞の場合)への変化が生じたことを確認する。すなわちひとつの事点に到達したことを叙述する。」を認めることとし、le が表すアスペクトを「事実態」と名付けることにする。これらの意義特徴の形式的裏付けとして次の例が挙げられる。(1) zhe とは共起できない。zhe は変化の成立という点的な事柄を表せず、安定した状態を表す。(2) zhe と guo (終息態) は、jiù と呼応できないが le は呼応して特定条件の成立および主文の事実の直前の事実などを表せる。そこで zhe と guo は1つの事柄内のアスペクトのみを表すために、一つの事実についてのみ叙述するが、le は1つの事柄が事実化した叙述から次の事柄の叙述へと移行する、叙述転換のマークと捉えることもできる。(3) いわゆる結果補語として一括される異相の状態を表す形式と共起する。(4) 離合詞に挿入した場合、言い切るためにはいくつかの特定の形式と共起する必要がある。回数、程度(一点儿)を表す形式や {(例) 你这样做过了点儿火。} 語気詞 le など話時点での確認を表す形式 {(例) 这下儿总算解了

围了。} または程度補語として異相の状態を叙述することを指定する(得)形式【(例) 孩子们听故事听得出了神。】など。すなわちゴールを明確に叙述して始めて叙述レベルの叙述を終えて述定をくわえることができる。

3—4. zhe の意義特徴

zhe と共起するかしないかの区別は従来動詞分類の重要な基準のひとつとされ、やがて木村 1981 をはじめ、zhe そのものにも 2 種類あると考えられるようになった。本稿ではヤーホントフ 1957 の動詞分類の名称とグループわけに準拠しつつも、その定義を文法的意義特徴の束として捉え直し、そのうえで zhe の意義素に幾つあるかを考察する。(1) 有限動詞—異相に関して弁別的意義特徴がある。(動作に必ずゴールがあり、しかも平相と異なる何かが残る。付着物、生産物) 異相の状態を描写する主題設定すなわち認定地点を主語とする統合型において、zhe (地点 zhe と仮称する) と共起する。平相から異相への移行に手間がかかる場合には、流相に関わる道具、方法、共役者などにも弁別的意義特徴が加わることがある。また、複数の対象が存在して一定期間に何度か繰り返し動作を行って始めてゴールに達する場合も、zhe (反復 zhe と仮称する) と共起しうる。(2) 無限動詞—流相に関して弁別的意義特徴があるが、異相に関しては無い。(動作にゴール=打ち切り点を設けるためには、他の形式の助けがいる。) 流相が意識的に、または自動的に継続中であることを表すために zhe (流相 zhe と仮称する) と共起する。従来、以上 3 種類の zhe の用法が区別されている。(3) 状態動詞—動作主または物体の精神、属性、資格、値打、認定地点が平相と異相とで異なるところに弁別的意義特徴がある。変化の過程に関して無規定なので(無視している)、原則として zhe と共起しない。本稿ではヤーホントフの分類と異なり、心理動詞をここに含める。(4) 非動作動詞—存在、呼称、同定判断などを表す。zhe や le と共起しない。「在、是、叫、象」などで、本稿では判断動詞と呼びかえる。

ここで、zhe が挿入できる 162 個の離合詞を次のようにグループわけして考察を加えることにする。

- 1E * * 很 hěn がつく 9
- 1F * * 很 hěn がつかない153
- 1G * * 完 wán が挿入できる115
- 1H * * 完 wán が挿入できない 47

本稿で調査した離合詞のうち、1E に属するものは、次の 9 個である。

担心, 多心, 发愁, 发火儿, 揪心, 留神, 纳闷儿, 伤心, 着急

これらは上記の定義に依れば「状態動詞」に相当するはずであり、原則から言えば zhe は挿入できない離合詞である。很 hěn は形容詞と共起する典型的な副詞だからである。そこでこの zhe が、どのタイプの用法に属するかを調べるために、これら 9 個の離合詞に共通の語義的意義特徴がないか検討してみる。

類義語（心配する、悲しむ）と見なしうる単語は3個あるが、表3-1のごとく語義的意義特徴については共通点が見いだされない。

（表 3-1）

離 合 詞	語 義 的 意 義 特 徴
担 心 * 目的語 をとれる	好ましくない事柄（平相で存在する既存の思考対象）が実現するのではないかと予想して（思考方法）心配する（心理状態） * * * guo が挿入できる
揪 心	自分の心が何かに掴まれ引っ張られているような苦痛を経験する * * * le, guo が挿入できる
伤 心	誰かの心を痛める状態が生じる。こころを特定しなければ、句のなかの経験者の心となる。原因となる事物が主語または修飾を受ける中心語となる。 * * * le, guo が挿入できる

そこで挿入成分との共起制限に基づいて（表3-2参照）、相互呼応によって見出される意義特徴のなかに共通点があるか調べてみる。

まず、(1) le とともに bàntiān を挿入できるが、yihuǐ は挿入しにくいこと（○ が無い）が共通点である。bàntiān（不定かつ相当長期間）は yihuǐ と比較すると、長期間を表す点で異なる。また (2) 「发火儿」を除いた8個は wán と共起しにくい（1H 類）「留神」以外はすべて好ましくない心理状態であるがゆえに、意識的に成立させた状態では無い。したがって、「継続相に対し意識的にゴールを設定する」操作も加えにくいと考えられる。この裏づけとみなせることだが「留神」のみが yíxià を無理なく挿入できる。さらにこれら、9個の離合詞の表わす心理状態は「尽き果ててしまう定量がある」とも考えられない。したがって、この9個の離合詞の意義素が表す事柄には1度生じた変化がもう一度異なる変化を起こすという保証はない。(3) 結果補語 shàng を挿入できる。（○—6個、△—2個）。shàng はその用例を検討すると、wán とは異なり「ある条件が整って自然に変化が成立する」という語義的意義特徴が見いだされる。以上の理由から、これら9個の離合詞に挿入できる zhe（異相 zhe と仮称する）が表すのは、同位値の法則に依って異相の持続と認められ、第4番めの zhe と言える。

また、これらの離合詞は、説明解説の伝達意義特徴を表わす「的 de」を挿入できない。すなわち叙述時点、叙述地点、事実化する方法、経験者または動作者など、一般の動詞が句の中で用いられると同時に、自動的に表しうる文法的意義特徴を担えないことがわかる。この文法職能は、形容詞と動詞を分ける大きな違いの一つである。「伤心」に挿入された de の用例も、shénme とともに用いられる反語表現（発話時点）の語気を表すものであり、説明解説の de とは異なる。そこで、これまで検討してきた9個の離合詞は、形容詞と状態動詞との兼類とみなすことができる。

では、上記の4種類の zhe に共通の意義特徴を見いだせるだろうか？ ここで 1G グル

(表 3-2)

挿入成分	担 心	多 心	发 愁	发火儿	揪 心	留 神	纳闷儿	伤 心	着 急
了	△	○	○	○	○		○	○	○
着	○	○	○	○	○	○	○	○	○
过	○	○	○	○	○	△		○	○
完	△			○				△	△ (wán)
好									
上	○	○	○	○	△	○	○		△ (shàng)
下									
开	○	△	○	○	△	○	○	△	○
…起…来	○	△	○	○	△	○	○	○	○
得 了		△		△					
不 了		△		○					
(一) 下 儿				△		○			(yíxià)
半 天	○	△	○	○	○	○	○	△	(bàntiān)
(一) 会 儿			△		△	△	△		(yíhuìr)
(过 / 了+数) 次			△	○		△			○
(过 / 了+数) 回	○		△	○					
(一) 点 儿		△		○		○			○
不 少	○		○						△
そ の 他			很多						
什 么	○	○	○	○	○	△	○	○	○
这 个	○		○	○		○			○
那 个	○		○	○		○			○
你 的	○		○	△	(△)			○	
我 的	○		○	△	△			○	
他 的	○		○	△	△			○	
谁 的	○		○					○	
的								△	
修 飾 表 現									
備 考	時に賓語を伴う。很～	太～了 很～	很～	很～	很～	很～	很～	很～， 伤透了心	很～

ープ (wán 挿入句) に対しても考察を加えることにする。1 G グループ 115 個のうち、50 個は hǎo も挿入できる。なおかつ wán と hǎo とが挿入できる離合詞はほとんどすべて zhe が挿入できる (△—6 個，×—3 個)) と報告があった。(このグループを 1 I とする) 一方では wán を挿入できても zhe が挿入できない離合詞は 102 個ある。hǎo が挿入できて wán ができない離合詞 13 個のうち、zhe が挿入できるものは 5 個である。したがって zhe の意義

特徴と一番深く関わりうるのは次の 1 I グループ(○のみ)と考えられる。

報名, 報帳, 备课, 备料, 播种, 补课, 插秧, 吃饭, 吹风, 存货, 存款, 打字, 存款, 打字, 读书, 挂号, 过年, 化粧, 还价, 还债, 换班, 交卷儿, 结帐, 解手, 纳税, 拟稿儿, 念书(1,2), 排版, 排队, 排戏, 盘货, 起草, 请假, 请客, 梳头, 卸车, 谢幕, 养病, 找事, 征兵, 值班

この 1 I グループの離合詞の語義的意義特徴を鑑みるに, 共通項を見いだすのは困難である。しかしその一方, 結果補語の側の意義特徴を検討してみると次のような手順で共通の文法的意義特徴を認めることができると思われる。

(1) wán と共起する離合詞は「流相のあり方を述べている」とみなしうる。(2) hǎo と共起する離合詞は「異相において, 目的とするに足る結果を残しうる」(3) したがってこの離合詞は「有限動詞」と認めうる。(4) 主語が動作主に限られる。(5) この zhe は「いづれ終結する流相の状態(変化途上)にある」こと(流相 zhe, または反復 zhe)を表す。

そこで, 4 種類の zhe は文法的意義特徴に関するデーターに基づいて, 流相に関わる 2 種類(流相 zhe, 反復 zhe)と, 異相に関わる 2 種類(地点 zhe, 異相 zhe)とに分けられることになる。しかし, 事点に関わる le と比較するならば, 安定した相を表すという共通点を有する。

4. おわりに

本稿で取り上げなかった文法課題については, 挿入成分以外の共起制限についてもデーターが必要となるので, 稿を改めることにする。本稿では方法論上次の二点に留意した。(1) 従来, ただ一つの単語との共起制限をもとに語彙分類が行われることが多かったが, 本来はどの意義特徴が原因で共起しているのか慎重に考察すべきであろう。また共起できないというデーターも, 意義素の分析に充分役立つものと考えられる。(2) 語義的意義特徴として扱うのか, 文法的意義特徴として扱うのかを, 最初から明確にしておくべきだと考える。語義の体系と文法の体系とを分けて考察してはじめて, いわゆる超越成分, 接続などが精密に分析できるはずである。今後, 文法範疇を仮定しつつ意味分析の対象をひろげていきたい。

(注 1) 筆者が用いる四段階の文法レベル(文文法として)

レベル	* 意味の名称	* 形式の名称	* 文法範疇
認定	意義素(弁別的意義特徴の束)	単語, 離合詞, 複合動詞	平相, 流相, 異相, 事点, 意味項目, 格 etc.
叙述	叙述内容(意義の重層)	統合型, 句, 複合句	叙述時点, 事実, 論理, 限定 etc.
述定	立場表現(表現者として)	単文, 文音調	真理基準, 現実基準, 好感基準 etc.
伝達	意味(発話者として)	発話(聞き手をめざす)	発話時点, 発話場面, 文脈, 省略 etc.

今後は更に会話と談話の段階を加えてゆく予定である。

(注 2) インフォーマント紹介。

鹿琮世(女性) 1953 年生。

李清華(女性) 1941 年生。 徐 曼(女性) 1950 年生。

尹景春(男性) 1956 年生。 顧京奇(男性) 1959 年生。

顧京異(男性) 1962 年生。 陽 光(男性) 1967 年生。

全員小学校入学時には北京在住。現在にいたる。

鹿先生と李先生とは「中国語離合詞 500」東方書店 1990 の著述者としてこのインフォーマント調査の基礎資料を作成された。

(注 3) △印として、次の用例を認めたインフォーマント有り。

「我和他同岁，又是邻居。可是在初中才同了学(了)。」

こういう用例は、「テンスの流れを設定する」という文脈の意味特徴を持つと考えられる。従って、「同学の意義素内に含まれる」「時間の流れに属する期間」が抑圧され、事柄としての面が特に浮きあがらされた用例と言えよう。

参考文献

- 服部四郎『意義素の構造と機能』1964『言語研究』45号
林 四郎『基本文型の研究』1960(明治図書)
趙 元 任『A Grammar of spoken Chinese』1968. California Univ. Press.
C. E. ヤーホントフ『中国語動詞の研究』1957(橋本万太郎訳 1986 白帝社) W. william『Two aspect makers in Mandarin』1965『Language』41
国広哲弥『意味論の方法』1981(大修館書店)
平山久雄『北京語の「着」とその接尾する動詞について』1959 中国語学 88号
木村英樹『付着の着 / zhe / と消失の / 了 le /』1981 中国語 No. 258(大修館書店)
荒川清秀『‘着’と動詞の類』1985 中国語 No. 306(大修館書店)
李 清 華『談離合詞的特点和用法』1984 語法教学与研究 2(北京語言学院出版社)
王硯農等『漢語動詞——結果補語搭配詞典』1987(北京語言学院出版社)
劉 月 華『動態助詞‘過 1’‘過 2’‘了 1’用法比較』1988『語文研究』1期
工藤真由美『現代日本語の従属文のテンスとアスペクト』1989 国立横浜大学紀要 No. 36